

神様の御心を 分かろうとしない人間

マタイ11章25～30節
2022年2月6日
松田 基子 師

神様の人間に対する悲しみは、沢山あるのですが、愛を込めて創造された人間が、その神様の御心を分かろうとしない事は、神様にとって、大きな悲しみだと思えます。神様は、世界を創造され、それを麗しく発展させて行く事をお考えになって居られました。そのために神様は、人間を創造し、愛を築き合せて、人間が神様の御心を悟る事によって、世界を管理させる事になさいました。

しかし人間は、神様を愛し、御心を知る為に与えられた自由意志を、自己中心で、自我を愛する事に使ってしまった。そのために世界は、神様の御心から逸れてしまいました。人間は、神様の御心を聞こうとせず、御心は伝わらなくなってしまう。神様は、そのご自身の御心を、人間に知って貰いたいと思われ、アブラハムに呼び掛けられました。彼は幸いにも、神様の呼びかけに応答しました。

神様は創世記12章2節で、

「わたしはあなたを大いなる国民にし、
あなたを祝福し、あなたの名を高める。
祝福の源となるように」

との約束を与えられました。神様はこの約束に従って、およそ八百年後、アブラハムの子孫のイスラエルが、エジプトの奴隷であった時、モーセを指導者に立てて、出エジプトを果たさせ、奴隷の身から解放して、

「ご自身の宝の民とする」

と宣言されました。神様がアブラハムを選び、その子孫のイスラエルを選ばれたのは、

『神様が、如何に人間を愛し、愛を築いて、
世界を祝福したいと願っておられるのか、
その御心を知らせるため』

でした。神様はそのために、イスラエルを、神様以外に、何も頼るものがない荒れ野に

導き、律法を与えて訓練されました。それは神様の深い愛の配慮に富んだものでした。

モーセは申命記8章の2節から、

「あなたの神、主が導かれたこの40年の荒れ野の旅を思い起こしなさい。こうして主はあなたを苦しめて試し、あなたの心にあること、すなわちご自分の戒めを守るかどうかを知らうとされた」

3節、

「主はあなたを苦しめ、飢えさせ、あなたも先祖も味わったことのないナマを食べさせられた。人はパンだけで生きるのではなく、人は主の口から出るすべての言葉によって生きることをあなたに知らせるためであった」

4節、

「この40年の間、あなたのまとう着物は古びず、足がはれることもなかった」

5節、

「あなたは、人が自分の子を訓練するように、主があなたを訓練されることを心に留めなさい」

と言っています。しかし、イスラエルの民は、このような神様の愛の導きと、配慮に対して、その御心を悟ろうとはせず、何時も目の前の自分にとっての不都合に対して、眩き、神様に不平不満を述べ立てました。

旧約聖書の歴史は、人間の代表としての、イスラエルが、如何に自己中心で、神様の御心を聴こうとも、行おうともしない者であるかを記しています。イスラエルの民は、神様の御力によって、先祖に約束された、カナンの地に導かれましたが、時が経つにつれて、自分の願望実現を求めて、偶像礼拝に耽りました。その結果は、国を滅ぼされ、バビロン捕囚の苦しみを味わいました。彼らはそこで、自分たちの造り主である、神様に心を向けて、悔い改めました。彼らは異教の地で、信仰の立て直しをしました。その時、力を発揮したのは、祭司の中でも、律法を筆写したり、解釈をした書記や秘書たちでした。彼らによって異教の地で、信仰は立て直されました。

彼らは、捕囚時代に、文書の収集、筆写、編集に当たりました。紀元前539年、ペルシャのバビロン征服により、捕囚民は解放され、ユダヤ人達も、エルサレムに帰ってきました。今度こそは、

『神様の御心を求めて、

律法に聞き従う生活をしよう』

と決心した、帰還民達は、紀元前515年に、粗末ながら、エルサレムに、第二神殿を再建しました。その後、彼らは列強の支配を受けながらも、律法遵守に力を注ぎました。それを支えたのは、捕囚時代から、律法第一の生活を指導してきた、リーダー達でした。それはやがて、高度な専門職となり、律法学者を産み出すことになりました。彼らは長年の学びと、研鑽を積み、伝承資料と解釈方法に精通し、宗教規則、裁判法規の専門家となりました。

文字通り、学者と呼ばれるに相応しい存在でした。その律法学者の教えに学び、従ったのが、ファリサイ派の人たちです。彼らが神様の前に遜って(へりくだって)御心を求め、人を愛し、尊んで、その業に当たることが出来たら、神様はどんなにお喜びになった事でしょう。しかし、彼らは、神様の御心に、心の耳を澄ませる事はせず、学問としての律法研究、人々からラビと呼ばれて、尊敬を集める心地よさに浸り、律法違反者を断罪する事に、自分の存在感を得ていました。神様は、そんな事のために、律法を与えられたのではありませんでした。神様の御心を聴こうとしない、分かろうとしない、イスラエルに、神様は、ご自身の御心、そのものである、独り子を、あえて貧しい、この世の称賛の対象にならない所に、しかし、神様に信頼して、ひたむきな信仰に生きる所に、誕生させられました。

神の独り子は、イエス様でした。イエス様は神様との交わりによって、律法に表されている、神様の御心を汲み取っておられました。イエス様は公生涯に立たれ、山上の説教で、多くの群衆に、教えられましたが、それを聴いた人々は、7章28節で、

「イエスがこれらの言葉を語り終えられると、

群衆はその教えに非常に驚いた。彼らの律法学者のようにではなく、権威あるものとしてお教えになったからである」

とあります。

イエス様は人間的な権威を持つとはされませんでした。神様の嘆き、それは神様に心を向けようとしなさい、聴こうとしなさい、従おうとしなさい、頑なに自我を通そうとする事です。それは、自分の考えを正しいとして、心を開かないことです。律法学者や、ファリサイ派の人々は、エルサレムの高名な律法学者の下で、学ばなければ、価値が無いと考え、

「ナザレから何の良き者がでようか」

と、頭からイエス様の存在を否定していました。故郷ガリラヤの人達も、同じ価値観で、イエス様の教えを、素直に受け入れようとはせず、

「この人は、ヨセフの子ではないか」

と、人間的な見方しかしませんでした。

イエス様もそんな彼らを嘆かれました。しかし、一方で、弟子たちを初め、イエス様の真実をその儘受け入れた人々を、とても喜ばれました。マタイ11章25節には、

「そのとき、イエスはこう言われた。

『天地の主である父よ、あなたをほめたたえます。これらのことを知恵ある者や賢い者には隠して、幼子のような者にお示しになりました』

と記されています。

イエス様はここで、

「天地の主である父よ、」

と、狭い人間の世界を更に狭くしている、イエス様を受け入れようとしなさい、律法主義の囲いから抜け出て、広い神様の真実の世界を見詰めて、世界の全てを創り、生かしておられるお方が、ご自身の父である事を喜び、信頼して親しく、

「父よ」

と呼び掛けられ、神様のなさったことの素晴らしさを、讃えておられます。

神様のなさることは、人間の価値観とは全く逆

です。イエス様は、

『律法学者だから、ファリサイ派の人だから、私の教えは聞かされない。

あっちへ行きなさい』

等とは、決して言うてはおられません。イエス様は律法学者であろうと、ファリサイ派の人であろうと、本気でイエス様の言葉を求めて来る人々に対しても、等しく、同じ心で、お話になりました。しかし、同じ言葉が語られたのに、受け止めた人によって、それは、命の言葉ともなり、批判の材料ともなったのです。

律法学者、ファリサイ派の人々は、律法の隅々まで熟知していました。彼らは知恵ある者、賢い者だと呼ばれていました。その彼らには神様の御心が分からなかったのですが、神様は決して、ご自身の真理を隠された訳ではありません。しかし、それは、幼子、岩波訳では、嬰兒で、(三才位までの)子供の心で、神様に全信頼して、素直に信じる心でしか、分からない、信じられないものなのです。結果的に人間の知恵は、それを疑い、拒否するのです。

ルカの18章15節から17節には、

「イエスに触れていただくために、人々は乳飲み子までも連れてきた。弟子たちは、これを見て叱った。しかし、イエスは乳飲み子たちを呼び寄せて言われた。

『子供たちをわたしのところに来させなさい。妨げてはならない。神の国はこのような者たちのものである。

はっきり言って置く。子供のように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない』

と記されています。このように大人たちは、人間の考えに立って、神様に聞こうとはせず、自分の考えを正しいとするのです。嬰兒のように、神様に信頼しなければ、御心は分からないのです。

イエス様は、26節で、

「父よ、これは御心に適うことでした」

と言うておられます。イエス様はご自身が、

貧しく低き、大工の子であるために、律法学者を初め、自分の信仰に驕り、イエス様を卑しめる人々に、認められないことを、意に介されませんでした。それは結果的に、真の信仰、神様への愛が、どんなものであるかが明らかにされることになりました。イエス様は神の御子としての、揺るがぬ確信をお持ちでしたから、イエス様を認めない人々の、人間的な考えよりも、イエス様ご自身に、神様の光を見出している、嬰兒の心をもった人々に、知らせたいことがありました。

それが27節です。

「すべてのことは、父からわたしに任せられています。父のほかに、子を知る者はなく、子と、子が示そうと思う者のほかに、父を知る者はいません」

と言われました。神様は、ご自身の人類への愛の御心が、人間に伝わらないために、御子を人の世に遣わし、人類の罪の贖いまで成させて、ご自身の愛を示そうとされているのです。その御心を知っておられるのは、御子イエス様だけでした。イエス様は十字架に架かって、人類の罪の贖いをなされたなら、神様のこの愛を、イエス様を信じる人々に、お示しになるのです。そのようにして、人は、イエス様を信じて初めて、天地の主である父なる神様を、知ることが出来るようになるのです。

そのイエス様が招かれます。28節に、

「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。

休ませてあげよう」

と言うておられます。イエス様の目には、神様の御心から離れて、律法学者、ファリサイ派の人々による、律法監視社会の中で、成さねばならない多くの事柄、してはならない数々の事項に、しばられている人々の姿が、映っていました。真面目に守ろうとする人にとっては、耐え難いことです。人々は皆、疲れていました。神様が与えられた律法は、本来良いものですが、生来、罪ある人間は、それを守ることは出来ません。その結果、律法は、罪を明らかにして、糾弾(きゅうだん)するのです。

そんな律法を守れないと、疲れ、罪の重荷を負う者を救うために、イエス様は、人の子となって来て下さり、その罪を十字架に贖って下さるのです。人は誰も、そのイエス様の贖いを受ける時、救われ、平安を得る事が出来るのです。イエス様以外に、この平安、安らぎを与えて下さるお方はいません。しかし、ここには、

「休ませてあげよう」

と言っておられるだけで、

「全ての重荷を、取り去ってあげよう」

とは、言うておられません。罪と悪が、満ちているこの世を、旅して行くのに、重荷がなくなることはありません。

イエス様は、マタイ16章24節で、

「わたしについて来たい者は、自分を捨て、(自分の思い願いをすて、)自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい」

と言われました。ここで、イエス様は、

『わたしはあなたの罪を負って、十字架に架かったのだから、それくらいの十字架を負わないでどうするのですか』

と言っておられるのでしょうか。いいえ、イエス様は、家畜小屋に人の子として、誕生されて、十字架の死に至るまで、人の生きる悩み、苦しみ、病、そして、罪の全てを負って下さいましたが、一言も、父なる神様にも、周りの人々にも、不平、不満を漏らされたことは、ありませんでした。

そのイエス様が、29節で、

「わたしは柔和で謙遜な者だから、わたしの轆を負い、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたは安らぎを得られる」

と約束されました。当時の農作業は、牛を使っていたのですが、2頭を使う時は、同じ速度で進むように、牛の首と首を繋ぐ道具である、轆(くびき)を懸けて進ませました。そのように、イエス様が、共に轆を負って下さると言うのです。轆は、確かに重荷です。でも、真横にいて下さるのは、イエス様です。イエス様は、あらゆる重荷、問題に関わって下さり、慰め励まし、知恵を与え、平安を与えて、天の国を目指して、共に歩いて下

さいます。

そこでイエス様は、

「わたしの轆は負いやすく、わたしの荷は、軽いからである」

と言っておられます。なぜでしょうか。それはその歩む道は、イエス様が共に歩いて下さる天国への、確かな道だからです。やがての日には、かしこに辿り着くことが出来るからです。その時の喜びは、地上のどんな苦しみ、悩み、痛みも、癒されて、余りあるものなのです。神様は、この愛の御心を、罪深く、疑い深い私たち人間に、分からせるために、イエス様をお遣わしになったのです。私たちは人間的なこの世の考えを捨て、聖霊の内住を求め、神様に信頼する幼子の心を与えていただき、イエス様の十字架の愛を信じ、イエス様に轆を共にして頂いて、この地上の旅路を、歩み貫いて参りましょう。

お祈りをいたします。

憐れみ深い天の父なる神様

ご自身に背いて、御心を分かろうとしない私たち人間のために、イエス様を遣わし、私たちの罪を十字架に、贖わせてまで、ご自身の愛の御心を示して下さいました事を、心から感謝します。

嬰兒の心をもって、イエス様を信じ、イエス様の轆に繋がれて、地上の旅路を歩み貫き、御国に迎えられる者として下さい。

尊い救い主、イエス・キリストの
お名前によってお祈りを致します。

アーメン。